

# 人と物がおりなす「生活文化圏」

民俗学者 神崎宣武

## (研究報告書のポイント)

身近な2つのテーマをとりあげて、庶民におけるダイナミックな文化圏の形成のあり方をたしかめる。

### 1 甕がつかない中国と四国

- かつて、日常の生活、物資の流通は、四里四方の内で行われていた（日帰りが可能な「日立て流通」）。中世になると、備前焼（岡山県）が量産され、特に大型の甕は、大きな粘土素地を割れや歪みなく焼成するのが困難で、貴重であり、「中域流通」（日常生活圏の4～5つ分）を成した。近世になると、釉薬が開発されたことで、石見焼（島根県）の窯場でも大型の水甕や味噌甕（1斗～4斗入り）が焼けるようになり、海運にたよって瀬戸内海沿岸の町や村に販路を広げた。大谷焼（徳島県）の藍甕あまがみや焼酎の仕込み甕（1石（10斗）以上）は企業用として中国地方のほぼ全域に流通した。こうした用途が尖化した商品は、近世以降の船運をもって広範流通がはかられていた。
- 「甕」は、中国地方と四国地方をつなぐひとつの文化史的なキーワードである。近世から近代にかけて、甕を通して中国・四国は一元にあり、人びとは、甕を使うことで、それがどこの産であるかを知り、結果として中国地方の人は四国を、四国地方の人は中国を、親しみをもって知ることができた。地方のさまざまな「流通圏」は、すなわち「文化圏」である。
- これまでの日本は、画一的な国づくり、地域づくりに偏ったきらいがある。それは、経済の合理性に基づいたからに相違ない。結果として、中央と地方の格差、都市と農山漁村の格差が生じた。文化圏をきちんとふまえた経済活性化でなくてはならない。地方の時代の地方とは、どういう単位がふさわしいか。広範流通圏、すなわち広範文化圏をいまいちど見直してもらいたい。

### 2 県境をこえての女たちの行商

- 海岸部と山間部では、徒歩の時代から頻繁に行商の往来があった。海産物の行商の担い手は女性であり、男たちが獲ったものを女たちが売りさばく。中国地方では石見（島根県）の海岸部で、四国地方では伊予（愛媛県）の海岸部で女たちの行商が最も発達した。石見からの行商は中国山地から山陽の台地部に、伊予からの行商は四国山地にも瀬戸内の島嶼部にも広がっている。
- 行商の女たちは、行った先々でなじみをつなぎ、商売以外にもつきあいを深め、定期的に泊めてもらう家とは、親戚づきあいが続いた。ただ単に経済活動にとどまらず、漁村と農村を、海村の文化と山村の文化をつなぎ、人びとは世間を広くしていたのである。